様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 16 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０４５５
研究課題名（和文）　日本語音声の教授・学習場面における発話データの分析システムの開発

研究課題名（英文）　The analysis of utterance data in the teaching and learning situation of Japanese pronunciation

研究代表者
小河原　義朗（OGAWARA　YOSHIRO）
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授
研究者番号：７０３０２０６５

研究成果の概要（和文）：同じ目標の実践でも、その成果に至る過程は異なる。実践を検証し、改善に結びつけるためには、何がどのように作用したのか、実践とその過程の詳細な分析の蓄積が不可欠である。そのための方法論として、発話データに基づく教室談話を分析することはその結果に至る過程を見ることが可能であり、そのような実践と分析が蓄積、共有されることによって、教師自身の信念、実践だけでなく、音声教育のあり方を問い直すことにもつながる。

研究成果の概要（英文）：Even if the purpose of the practice of teaching Japanese pronunciation is the same, the process to the result is different. For evaluating and improving the practice, it is necessary to analyze the process of practice to the result. For that, the analysis of utterance data in the teaching and learning situation makes it possible to observe the process to the result. And the accumulation and the sharing of such analysis also enable us to reflect not only the teachers' belief and practice but also how pronunciation teaching should be.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：日本語教育
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：日本語音声教育・教室談話

１．研究開始当初の背景

近年の日本語音声教育研究では，教える対象となる日本語音声の言語学的側面だけでなく，学習者の習得過程の研究（小河原(1997)，佐藤(2001)など）や，日本語母語話者がどのように学習者の発音を評価するのかという日本人評価研究（小河原(2001)，松崎・河野(2005)など）など，音声教育の実践をより意識した研究が進められるようになった。さらに，日々の音声教育実践の蓄積から具体的な指導方法や教材が開発される事例（西村他(2002)，ＶＴ法研究会（2005)，後藤他(2006)など）やコンピュータによる教育支援（才田(1997)，小河原・池田(2003,2004)，小河原(2004)，才田・井口・高橋・小河原(2007)など）も報告されている。

このようないつ何を教えるべきかという基礎研究や，どのように教えるかという指導方法や教材，支援システムの開発，ある考えに基づいた実践でどのような効果が得られたのかといった実践研究の蓄積は，日本語音声教育の発展にとって不可欠である。

しかし，これまでの研究は具体的な指導場面において教師は何を考えて，実際にどのような発話，行動をし，その結果教室でどのようなことが起こり，学習者にどのような変化が起こったのかという実践の過程そのものを明らかにするものではなかった。つまり，学習者の習得過程や音声教育シラバスの研究，教材や支援システムの開発，実践報告が行われる一方で，指導場面において実際に参加している教師と学習者が何をして，何が起こっているのかについてはこれまであまり論じられてこなかった。同時に，それらの実態を記述するための質的な方法論も検討されてこなかった。そのため，様々な実践が様々な現場で試みられたとしても，結果や効果のみが議論され，そもそも教師の考えと実際の発話や行動が一致しているのか，その発話や行動によって学習者に何が起こったのかといった実践の過程そのものが見えにくく，実践が充分に検証されないままに終わってしまい，授業改善に結びつかず，本当の意味で音声教育実践研究の蓄積，共有に至っていないのが現状である。

そこで，現在の日本語音声教育の実践や学習場面を整理した上で，そこに参加する教師と学習者間，学習者間，学習対象と学習者間で起きる具体的なやりとりについて，主に発話データの分析を通して，教授・学習場面の実態を明らかにする質的な研究方法を開発する必要がある。それによって，広く現場の授業改善が進み，日本語音声教育実践研究の蓄積と共有が可能となる。

２．研究の目的

(1)　日本語音声の様々な教授・学習場面において，そこに参加している教師と学習者間，学習者間，学習対象と学習者間の相互作用を対象として，主に発話データを中心に非言語的なデータ，参加者へのインタビューデータなども含めて広く収集する。

(2)　収集された各場面において各参加者が何を考え，実際に何をして，何が起こっているのかについて，質的なアプローチによる分析を行い，日本語音声に関する具体的な教授・学習過程の実態を解明する。

(3)　(2)の分析結果をもとに、現職者教師研修やあらゆる現場教師が授業改善に利用できるように，質的な研究方法論として整理，検討する。

３．研究の方法

(1)　データ収集環境の整備

まず，多様な発話データが収集できる環境を整備する。その１つとして、継続的なデータ収集を可能とするために，研究代表者の所属センターの教室にデータ収録設備を設置する。

データ収集に際しては，教授法，教材，教具，教室活動，教室内外，クラス形態，クラスサイズ，コンピュータ等の相互作用の媒体，聴解・発音等の教授・学習内容など，主に日本語音声に関する様々な教授・学習場面を検討，収集する。近年では e-Learning システムなど，音声教育・学習支援のためのコンピュータ利用が盛んに検討されていることから、コンピュータ利用場面におけるデータ収集も行う。

(2)　発話データを分析するための質的アプローチの検討

発話データの分析手法として，様々な質的アプローチからの検討を行なう。近年，教授・学習場面における学習者の理解プロセスや授業の展開構造の詳細を明らかにするために，参加者の発話を記録し分析する手法が検討されている（秋田(2007)など)。特に，教室場面でのやりとりを対象とするアプローチとして，Rex,Steadman,& Graciano(2006)は①結果－産出アプローチ，②認知的アプローチ，③社会的アプローチ，④エスノグラフィーアプローチ，⑤談話分析アプローチ，⑥批判的アプローチ，⑦教師研究アプローチにまとめている。本研究では，談話分析を専門とする研究協力者の協力を得ながら、発話データの分析を行ないつつ、様々なアプローチの可能性を検討する。

(3)　データ収集と分析

データの収録には、ビデオカメラ，IC レコーダー，ボイスレコーダーを用いるが，発話データ以外にも教授・学習過程において使用されたワークシートや記述内容，事後の参加者へのインタビュー等のデータも収集する。

これらのデータが収集され次第，質的アプローチによる分析を行なう。質的アプローチについては，各種研修会，ワークショップ，研究会，学会などに参加し，最新の情報収集を行なう。

(4)　分析システムの整備と成果の公開

各種データを収集，分析する一連の過程を分析システムとして整理し、論文の形で公開する。さらに、現職者教師研修やあらゆる現場教師が授業改善に利用できるように，研究成果については，所属機関における研修会等においてワークショップ形式の研修会を開

催する。

４．研究成果

(1)　多様なデータ収集と継続的なデータ収集環境の構築

日本語音声の教授・学習場面における多様な発話データが収集できる環境整備を行った。そして、研究代表者の所属センターの教室に設置したデータ収録設備（IP ネットワーク映像監視システム）と、デジタルビデオカメラ、IC レコーダー等により、日本語音声の教授・学習場面における多様な発話データを収集した。データ収集に際しては、主に、近年では e-Learning システムなど，音声教育・学習支援のためのコンピュータ利用が盛んに検討されているため，本代表者と連携研究者で開発した音声教育支援システムやコンピュータをはじめとするマルチメディアの利用場面についても行なった。

特に、データ収録設備については、１室増設されて２室となり、本研究だけでなく、今後は所属センターにおける様々な日本語教授・学習場面における多様な発話データの継続的、組織的な収集が可能になり、教室談話の質的研究のための基盤が確立された。

(2)　発話データを分析するための質的アプローチの検討

本研究では、主に研究協力者と連携した談話分析アプローチによって発話データを分析したが、他の分析アプローチの可能性として、学習科学による検討を行なった。学習科学は教育実践の現実の中で見出した問題を科学的に分析・吟味・理論化し、それを再び教育実践の現実に還元しようとする実践的な理論である。本研究を通して、学習科学の研究者とのネットワークが構築されたことから、日本語教育における発話データの分析のための有効なアプローチとして検討を継続する。

(3)　日本語音声に関する具体的な教授・学習過程の実態とその分析のための方法論

収集したデータの中から、学習目標は同じで、対象となる発音が目標発音に変化する過程が現れている２つの発音指導の事例を取り上げ、その過程の中で学習者が実際に何をしているのか、その行動を教室談話に着目して分析し、比較することを試みた。

その結果、同じ目標の実践でも、教室指導と個人指導の違い、PC 使用の有無、学習者に与える情報や発話機会の質と量などによって、その詳細はかなり異なっていた。また、学習者は単に教師から与えられる情報や指示通りに学習しているわけではないことも明らかになった。これらのことから、単に情報の量や質ではなく、情報をリソースとして学習者が何をするか、それを予めどのように仕掛けるかを考えることが教師の役割として示唆された。

しかし、同じ目標の実践でも、成果に至る過程は異なるのが普通であり、何がどのように作用したのか、実践とその過程の詳細な分析の蓄積が不可欠である。そのための方法論として、発話データに基づく教室談話を分析することはその結果に至る過程を見ることが可能であり、そのような実践と分析が蓄積、共有されることによって、教師自身の信念、実践だけでなく、音声教育のあり方を問い直すことにもつながることが指摘できる。

つまり，教授・学習場面において教師が自らの実践について，実際に何を考え，どのように行動し，それによって何が起きたのかを具体的な発話をもとに振り返り，分析することによって，改めて教師自身の教育観が明確になり，実際の行動と結びついた形で実践が検証，改善されるものと考えられる。それと同時に，本研究で行った発話データの分析自体が，これまでの日本語音声の言語学的研究や習得研究だけでなく，日本語音声教育研究において，教師の教育観や教室における具体的な言動を対象とする音声教育の授業研究，教師教育研究へと発展すると期待される。

そこで、発話データによる分析の意義を多様な教授・学習場面において検証し、分析を蓄積するために、教室談話という制度的談話における参加の枠組み、さらにその枠組みをリソースとして捉える視点に基づいて、読解授業における学習者間の相互行為を取り上げて分析を試みた。

その結果、学習者間ではタスクを達成するために参加の枠組みを利用しながら様々な相互行為が起こっており、そのパターンがタスクを達成する過程で繰り返されることで強化されていく事例が見られた。

このことから、教室における様々な指導・学習場面において実際に何が起きているのか、その実践の過程を明らかにするためには、多様な教授・学習場面における発話データに基づく教室談話を分析することの意義を改めて指摘できる。

(4)　発話データによる分析の共有

これまでの音声教育に関する現職者日本語教師研修では，日本語音声の言語的側面や他言語との対照，指導上の情報提供にとどまり，各参加者の問題意識に即した実践的授業改善を目指した研修が困難であった。

そこで、本研究における１つのデータを収集，分析する一連の過程を分析システムとして整理し、現職者教師研修やあらゆる現場教師が授業改善に利用できるように，所属機関においてワークショップ形式の公開研修会を開催した。今後もこのような機会を継続さ

せていく予定であるが、ワークショップ形式等の教師研修を通して，国内外の現職教師が自らの実践を対象とした授業改善が可能となり，研修後も継続して情報交換や広く日本語教育実践における授業改善の促進に結びつくものと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①小河原義朗、音声教育のための授業研究－発音指導場面における教室談話の分析－、日本語教育学会誌、査読有、142 号、2009、pp. 36－46

〔図書〕（計１件）
①池田優子、小河原義朗、日本語音声教育実践におけるコンピュータ利用の可能性－自己モニターの促進を目指した音声教育実践を事例にして－、日本語教育の過去・現在・未来、水谷修監修、第４巻、音声、凡人社，2009、pp. 139-164

〔その他〕
①河野俊之、小河原義朗、「みんなで考える日本語音声指導」、凡人社イベント、2009
②熊谷智子、木谷直之、小河原義朗、教室の中での相互行為－学習者が学習者に質問するとき－、第 20 回北海道大学留学生センター日本語学・日本語教育ワークショップ、2011

６．研究組織
(1)研究代表者
小河原　義朗（OGAWARA YOSHIRO）
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授
研究者番号：70302065

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
池田　優子（IKEDA YUKO）
慶應義塾大学・日本語日本文化教育センター・専任講師（有期）
研究者番号：60383957
井口　寧（INOGUCHI YASUSHI）
北陸先端科学技術大学院大学・情報科学センター・准教授
研究者番号：90293406